

大谷大学での三十年

——『名所和歌抄出』を中心に——

はじめに

『俊頼髓脳』に初めて出会ったのは、学部の四回生の頃だった。『今昔物語集』と同じ説話を載せながら、なぜ一方が説話集、もう一方が歌学書に分類されるのかという実に素朴な疑問から、『俊頼髓脳』を卒業論文の対象に選んだのである。結論は、文末の記述から両者の違いが読み取れるという他愛のないものだった。大学院に入るとさすがに同じテーマでは続かず、『俊頼髓脳』の諸本論に方向を転じた。三十年前は現代ほど資料の収集、集中が進んでいなかったため、青森から長崎まで各地の図書館にカメラを掲げて出かけてはひたすら諸本を集めた。最近の即位礼正殿の儀を見て思い出すのは、かつて

赤瀬知子

何度かいたいただいた宮内庁での昼食、職員さんと同じ昼食で御料牧場と記された牛乳瓶も不思議だった。後から人に聞いた話では、米も野菜も牛乳もすべて宮内庁の中で自活できるように栽培されているのだとか。また、諸本探訪は学生の貧乏旅行だったので、たびたび時間的な無理もした。ある時は早朝に東京を発って、仙台、盛岡、八戸を一日で回った。暮れてゆく東北本線に揺られながら、ああ、これが賢治の故郷なのだなあという感傷に浸ったりもした。あれもこれも楽しい思い出である。ただし、そうしたことを超えた諸本論の喜びは、私の場合、揺るぎようのない証拠の上に持論を立てられるところにあった。『俊頼髓脳』しかり、次の研究テーマであった『内裏名所百首』しかり。

もう一つの大きな研究テーマである『名所和歌抄出』⁽¹⁾

については、室町時代の連歌師宗祇（応永二八（一四二一）年—文亀二（一五〇二）年、八二歳）の『浅茅』⁽²⁾という連歌学書にその『名所和歌抄出』が少なからぬ影響を与えたことを三十年前に指摘した。⁽³⁾さらに最近では、宗祇の他の著作や連歌作品、つまりは彼の創作活動全般に『名所和歌抄出』が影響を及ぼしたのではないかと考えるに至った。そこで、『名所和歌抄出』についての一連の研究をひとまずここにまとめることとしたい。

一 宗祇『浅茅』と『名所和歌抄出』

愛知県西尾市岩瀬文庫に蔵される『名所和歌抄出』は縦二五・八cm×横一七・八cmの上下二冊、仮綴の写本で、外題は打付書きで「名所和歌抄出」（上）、「名所和歌集出」（下）、内題は「名所和歌抄出」である。本文料紙は楮紙、表紙は宿紙で、墨付は上冊五九丁、下冊四九丁で遊紙なし、一面九行、和歌一行書きで識語はないが、各冊冒頭に「仁和寺菩提院」という朱長角印を有する。柳原家旧蔵本かと目されるが、「柳原庫」の印記はない。⁽⁴⁾江戸時代初期頃の書写ながら成立年代は十四世紀頃かと推定されている。⁽⁵⁾

宗祇の連歌学書『浅茅』は、明応九（一五〇〇）年に赤松家の家臣である葦田友興の取り次ぎにより、大三島社の関係者かとされる越智久通に宗祇が書き与えたものである。その内容は、実際の連歌作品に解説を加えた前半部と、名所いわゆる歌枕に関する和歌や寄合語を集めた後半部とから成っている。ここでは、その後半部をかりに「名所部」と名付けることにする。

『浅茅』名所部の和歌や寄合語の典拠について、従来はそれらに付された集付が重視されてきた。しかしながら、『浅茅』名所部には計一八七首の名所和歌とその数倍の寄合語とが掲げられている。それらを個々の勅撰集や百首歌から集めるというのは、手間のかかる煩雑な作業であったと思われる。とすれば、宗祇の身近に、和歌とともに寄合を収める便利な名所歌集があつて、宗祇はそれを用いたとも考えられるのではあるまいか。そのような仮説のもとに、『浅茅』名所部と中世の名所歌集について、名所の総数、名所の配列、国々の配列、名所の表記、名所和歌、寄合語を比較してみた。すると、『浅茅』名所部と岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』⁽⁶⁾とは、一致する名所の数が他の名所歌集に比べて多く、また、名所の配列、その表記の仕方、名所和歌、名所に関する寄合

語などについても、両者には共通点が多いことが分かった。たとえば、

○名所の表記

鈴香山（浅茅、名所和歌抄出）―鈴鹿山（歌枕名寄ほか）

佐野山―佐夜中山、佐夜長山

荒血山―荒乳山

「鈴鹿山」には『歌枕名寄』のように「鹿」という漢字を宛てる名所歌集が多いのに対して、『浅茅』名所部と『名所和歌抄出』は「香」という漢字を宛てている。

また、『歌枕名寄』などが「佐夜中山」あるいは「佐夜長山」と記す名所を、『浅茅』名所部と『名所和歌抄出』は「佐野山（さやのやま）」と記すという違いもみられる。さらに、一般に「荒乳山」と表記される名所を『浅茅』名所部と『名所和歌抄出』とは「荒血山」と記しているなど。要するに、『浅茅』名所部と『名所和歌抄出』とは、そのようなやや特殊ともみられる表記を共通して用いているのである。

また、『浅茅』名所部に収める名所和歌が『名所和歌抄出』にどれほど一致するのを見てみると、

○名所和歌

イ 『浅茅』名所部に収める歌の総数 一八七首
ロ イのうち、『名所和歌抄出』に一致する数 一
一八首（十四二例）
ハ イに対してロの占める割合六三・一%（八五・六%）

（右の数値は小数点以下第二位を四捨五入したものである。以下同じ）

『浅茅』名所部の名所和歌で『名所和歌抄出』に一致するものは一一八首、その割合は六三・一%となり、これはあまり高い数値とはいえないように見える。ただし、注意すべきは『名所和歌抄出』の名所には、歌の掲げられていない名所が多いのである。たとえば、次のようなものである。

○右の口に準ずるもの（四二例のうち）

（集付などの朱書を特に区別して示すことはしなかった。以下同じ）

『浅茅』名所部

小倉

夕月夜をくらの山に鳴鹿のこゑのうちにや秋はくる
らん

谷の梯 もみち 野里

『名所和歌抄出』

小倉

古 夕月夜 鹿 郭公^{後藤} 谷^金の梯紅葉しにけり

千 桜 ともし 駒^堀 響虫^同 鳴鹿^{新古}の音をのみそ鳴

同 こよひの月 ふもとの野への花薄 麓^同の里

同 木すゑにはるゝ月を見るかな

『名所和歌抄出』には、「小倉」に関連することばや歌の一部分が掲げられているだけで、それぞれの歌の一首全体の姿は示されていない。しかしながら、『名所和歌抄出』に見える「夕月夜」「鹿」ということは、『浅茅』名所部の「夕月夜」という歌に照応している。このように『名所和歌抄出』に掲げられていることばと『浅茅』名所部の歌とが照応しているものは、計四二例に上る。そこでこの四二例を先ほどの一一八首に加えると、計一六〇首になる。すなわち、『浅茅』名所部に収める和歌の八五・六%までが『名所和歌抄出』に照応するということになる。

詳細は前掲拙稿に譲るが、以上のことがらを総合すると、宗祇の連歌学書である『浅茅』の名所部と岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』とは、きわめて密接な関係にあるものと考えられた。『浅茅』名所部に典拠というものがあ

ったとすれば、それは岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』にごく近いもの、よく似た名所歌集であったという可能性がたかいとの結論に達した。

二 宗祇『万葉抄』と岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』

その後、平成二八年に『名所和歌抄出』の翻刻を文栄堂から公刊させていただいたことが一つのきっかけになって、関連することがらが少しずつ明らかになってきた。それは、『名所和歌抄出』という名所歌集の影響が『浅茅』のみにとどまらず、宗祇の他の著作、たとえば宗祇作とされる『万葉集』の注釈書である『万葉抄』、さらには彼の連歌作品にも及んだ可能性があるのではないかと考え、そうしたことがわたくしの最近の主な研究課題となった。そこで、この章では宗祇『万葉抄』と岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』の関係について検討を加えたい。まず、宗祇『万葉抄』に収める歌の総数について諸説を掲げておく。

第一節 宗祇『万葉抄』の総歌数

宗祇『万葉抄』（広本）は文明六（一四七四）年以降同

一四年までの成立かと推定され、収める万葉歌の総数については、従来次のような報告がなされている。

・渋谷虎雄『万葉集抄』（日本古典文学大辞典）：一一六〇余首

・小島吉雄「宗祇と兼載の万葉集研究」：一一六〇首

・両角倉一「宗祇連歌の研究」：一一六三首

・拙稿「中世における『万葉集』享受の一樣相―『名所和歌抄出』を中心に―」⁽¹³⁾

：一一三七首

一一六〇首余りというのが学界の共通認識のようである。それに対して、拙稿の計算のみ一一三七首と三〇〇首程少ないが、これは岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』と本文の比較をするために、宗祇『万葉抄』から万葉歌の一首全体の掲出ではない抜粋二三首と異伝歌二首とをかりに除いたためである。

第二節 宗祇『万葉抄』のうち岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』に一致する歌

宗祇『万葉抄』の総歌数一一三七首のうち岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』に一致する歌：計一〇一首

割合（％） 一〇一首／一一三七首 〓八・九％

宗祇『万葉抄』の全歌数をいま仮にわたくしの試算通り一一三七首だとすると、その中で岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』に一致する歌は、右に掲げた一〇一首となり、またその一〇一首が宗祇『万葉抄』の全歌数に占める割合は八・九％ということになる。これは、第一章での『浅茅』名所部における六三・一％、あるいは八五・六％に比べるとかなり低い数値とみられるかと思う。

第三節 宗祇『万葉抄』のうち『万葉集抜書』に一致する歌

第二節と同様の計算を『万葉集抜書』という書物についても行ってみた。

宗祇『万葉抄』の総歌数一一三七首のうち『万葉集抜書』に一致する歌：計一〇六七首

割合（％） 一〇六七首／一一三七首九三・八％
『万葉集抜書』についてはこの三月に景井詳雅氏が「宗祇によって作成された抄出本『万葉集』であり、『宗祇万葉抄』の土台となった歌書でもあった」と指摘され、写本としては石川武美記念図書館蔵本（旧お茶の水図書館蔵本）と東大寺図書館蔵本との二書が知られる。

右に示したように、こちらは一致する歌が一〇六七首、その割合は九三・八%という結果になる。すなわち、宗祇『万葉抄』の歌は数的に見ても割合から見ても、『名所和歌抄出』よりも『万葉集抜書』の方により一致する度合いが大きいと考えられるのである。

ただし、宗祇『万葉抄』と『名所和歌抄出』がほとんど関係を有さないかという点、必ずしもそうは言い切れない。たとえば、両者には漢字や仮名の違い以外、異同の見られない歌が計三七首数えられ、本文の近さがうかがえる。そこで、以下においては両者の本文の異同について、『万葉集抜書』も含めて検討してみる。

第四節 宗祇『万葉抄』（宗）と岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』（岩）、『万葉集抜書』（抜書）との
本文の比較（傍線は引用者による）

なお、通行の『万葉集』の本文および現代語訳の引用は、岩波新日本古典文学大系に拠る。以下同じ。

A まず、宗祇『万葉抄』と岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』とで漢字や仮名の違い以外に異同の見られない三七例について検討する。

①『万葉集』四六 阿騎乃野尔 宿旅人 打靡
あきのののに やしろるひつと うちみぎ
寐毛宿良目八方 古部念尔（卷一・柿本人麻呂）
いもぬらめやも いにしへおもふに
（歌意）阿騎の野に仮寝する旅人たちは、伸び伸びとくつろいで眠ることができようか、往事のことを思うと。

宗 安騎の、に宿る旅人打靡きいもねられしや古へ
思ふに
岩 万十一 あきの、にやとる旅人打なひきいもねられしや
いにしへおもふに

抜書（当該歌なし）

①の例において、通行の『万葉集』四六番歌は第四句を「いもぬらめやも」と訓む。それに対して宗祇『万葉抄』と岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』とは同じく「いもねられしや」と訓んでいる。一方、『万葉集抜書』は当該歌を載せていない。

②『万葉集』四八 むかしの 東野炎 立所見而
かへりみすれば つまかたぶきぬ のにかまひの たつみえ
反見為者 月西渡（卷一・柿本人麻呂）
（歌意）東の野に陽炎の立つのが見えて、振り返って見ると月は西に傾いてしまった。

・賀茂真淵以前の訓み「あづま野のけぶりの立てる所見てかへりみすれば月傾きぬ」
(新大系脚注)

宗 あつま野の煙のたてる所みてかへりみすれば月

かたふきぬ

岩 あつま野の煙のたてる所みてかへりみすれば

月かたふきぬ

拔書 あつま野にけぶりのたてる所みてかへりみす

れは月かたふきぬ

②の例では、『万葉集』48番歌の初句から第三句を通
行の『万葉集』は「ひむがしのかぎろひのたつみえ
て」と訓んでいて、この訓は非常によく知られている。

それについて新大系脚注には「ここに示した訓み下しは
賀茂真淵の案出したもので、彼以前の訓みは「あづま野
のけぶりの立てる所見てかへりみすれば月傾きぬ」であ
ったと記している。つまり、従来「あづま野のけぶり
の立てる所見て」という訓みであったものを、真淵が
「ひむがしのかぎろひのたつみえて」という新しい
訓を創り出しそれが人口に膾炙したということらしい。
真淵以前の「あづま野のけぶりの立てる所見て」という

訓みは、宗祇『万葉抄』と岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』
に一致しているが、「あづま野に」と記す『万葉集拔書』
には一致していない。

③『万葉集』二五六

けひのつりふね
あまのつりふね
乱出所見 海人釣船

一本云、武庫乃海、尔波好有之

いざりする あまのつりふね なみのうへゆみゆ
伊射里為流 海部乃釣船 浪上従所

(卷三・柿本人麻呂)

(歌意) 飼飯の海の漁場は穏やかであるらしい。(刈
薦の) 入り乱れて漕ぎ出て行くのが見える。海人
の釣り船が。

宗 氣比の海にはよくあらしかりこもの乱てみゆ

るあまのつり舟

にはよくあらしとはなきたる時を云也。か
りこもはみたる、といはんため也。

岩 けひの海にはよくあらしかりこもの乱てみゆ

る海士の釣舟

拔書 けひの海にはよくあらしかりこもの乱出て

みゆあまのつり舟

通行の『万葉集』二五六番歌は第四句を「みだれていづみゆ」と訓んでいる。それに対して宗祇『万葉抄』と岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』は「乱(れ)てみゆる」と訓み共通している。『万葉集抜書』は「乱(れ)出(で)てみゆ」あるいは「乱(れ)出(で)てみゆ」と訓んでおり、どちらかといえば通行の『万葉集』の訓みに近いようである。

以上、宗祇『万葉抄』と『名所和歌抄出』とで本文の一致する三七例のうち三例を掲げて検討したが、三例とも『万葉集抜書』に当該歌が見当たらない、あるいは、『万葉集抜書』とは本文の一致しないという例であった。そこで以上の三七例について、宗祇『万葉抄』、岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』、『万葉集抜書』という三者の関係をまとめてみると、次のようになる。

○三七例の内訳

二七例：宗祇『万葉抄』・『名所和歌抄出』・『万葉集抜書』の三者の本文が一致

六例：『万葉集抜書』の本文は宗祇『万葉抄』・『名所和歌抄出』に一致せず

四例：『万葉集抜書』に当該歌見えず

すなわち、三七例のうち一〇例は『万葉集抜書』に当該歌が見えなかったり、本文が異なっていたりするのである。こうしたことからすれば、『万葉集抜書』が、数的に見て宗祇『万葉抄』の主要な典拠と考えられるにしても、解決しきれない問題も残るように思われ、今後の検討が俟たれるところである。

B 宗祇『万葉抄』と岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』とで本文に異なる見られる場合について検討する。

④岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』に誤字、脱字等があり、それを傍書等により訂正している場合——二六六・三七一・九五七・三〇九七の四首（二六六に二箇所なので計五箇所）

九五七 万六 いさやこらかしゐのかたに白妙の袖さへぬ
きて朝なつみてん （傍書「れ」。「き」に見せ消し）

三七一 万三 おふのうみの河原のちとりなかな鳴は我さほ
川のおもほらくに （傍書「ゆ」）

三〇九七 万十二 篠のくまひの川に駒とめてしはし水かへ

かけをたにみん

(傍書「くま」)

岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』は『万葉集』九五七番歌の第四句を「袖さへぬきて」と記し、「き」に見せ消ちを付し、また「き」の右側に傍書で「れ」と記す。ついで『万葉集』三七一番歌の第五句について、岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』は「おもほらくに」と記すものの、右側に「ゆ」を添える。さらに、『万葉集』三〇九七番歌の第二句については、岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』は「ひの川に」と記した右側に「くま」を添えている。いずれの場合も見せ消ちと傍書によって本文の誤字・脱字の訂正が試みられている。

⑤ 『万葉集』二二五一 粟路之あはぢの野嶋之前乃のしまのさきの 浜風尔はまかぜに

妹之結いもがむすひし 紐吹返ひもふきかへす

(卷三・柿本人麻呂)

(歌意) 淡路の野島の崎の浜風に、家の妻が結んでくれた旅衣の紐を吹き返させている。

宗 あはみちの野しまか崎の浜風に妹か結しひも吹

かへす

岩 あつまちの野しまか崎のはま風にいもか結ひし

ひも吹返す

拔書 あはみちの野嶋かささの浜風にいもかむすひ

しひも吹かへす

⑤の場合、通行の『万葉集』二二五一番歌は初句を「あはぢの」と訓み、字足らずである。それに対して宗祇『万葉抄』は「あはみちの」と訓み、字足らずを解消しており、『万葉集拔書』の「あはみちの」に一致している。岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』は当該歌を「安房国」に入れていて、「あつまちの野しまか崎」を「東海道(安房国)の野島が崎」と解釈しているようで、通行の『万葉集』が「野しまの崎」を現在の兵庫県の「淡路」に比定するのは見方が異なっている。ついでにいえば、宗祇『万葉抄』などの「あはみち」については、歌ことば歌枕大辞典、角川古語大辞典などにも記載されていないが、『万葉集』二二五一番歌の初句を訓読みしたものでろうか。

⑥ 『万葉集』一一七二 何処可いづくにか 舟乗為家牟ふなのりしけむ 高嶋之たかしまの

香取乃浦従かとりのおらゆ 己芸出来船こぎでくるふね

(卷七)

(歌意) どこで船に乗ったのであるうか。高島の香取の浦から漕ぎ出して来る船は。

宗 いくつにかふなのりすらむ高嶋のかとりの浦に
こきいづるふね

岩 いくつにか舟のりしけん高嶋のかとりの浦にこ
き出る舟

拔書 いくつにか舟のりすらん高嶋の香取の浦にこ
き出る舟

通行の『万葉集』一一七二番歌が第二句を「ふなのりしけむ」と訓むのに対して、宗祇『万葉抄』は「ふなのりすらむ」と訓んでいる。それにほぼ一致するのが『万葉集拔書』の「舟のりすらん」で、一方、岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』は「ふなのりしけん」で、通行の『万葉集』の訓に近似する。すなわち、⑤と⑥の場合、宗祇『万葉抄』の本文は、岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』には一致せず、『万葉集拔書』に一致することがうかがえるのである。

第五節 宗祇『万葉抄』と岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』の一致箇所
の偏在

宗祇『万葉抄』と岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』と本文に異なる先前三七首の万葉歌について、『万葉集』のどの巻に属するか、その巻数を調べてみたのが次表で

ある（歌番号は、『万葉集』の歌番号。歌順は宗祇『万葉抄』のそれにしたがう）。

表

巻一	四八・四六・一一二
二	一三二
三	三七五・三一八・二五六・四四六・四一八
四	五〇一・四九六・五六七・五六一・五七五
五	八五四
六	一〇六六・一〇三〇・九四五・九一九
七	一三一五・一一五六・一一三一・一一二二
八	〇・一二四六・一二三〇 (該当歌なし)
九	一七三〇・一六九九・一七一〇
十	二一九三・二三三二
十一	二四五六・二七二七
十二	三〇七二・三〇八七・三一七三
十三	(該当歌なし)
十四	(該当歌なし)
十五	(該当歌なし)
十六	(該当歌なし)
十七	四〇一八

十八 四〇九七

十九 (該当歌なし)

二十 (該当歌なし)

右の表によると、宗祇『万葉抄』と『名所和歌抄出』とで本文に異なる先の一三七首は、『万葉集』の巻一から巻十二までに集中している、いいかえれば偏在していると見ることが出来る。そのことから、宗祇は『万葉抄』を著す際に、巻十二以前の万葉歌の本文について、『名所和歌抄出』に近い名所歌集を参照したという可能性も否定しきれないと思われる。

第六節 宗祇『万葉抄』と岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』に収める万葉歌の歌数

・宗祇『万葉抄』：一一三七首

・『名所和歌抄出』：一五八首

宗祇『万葉抄』の万葉歌の歌数は一一三七首、『名所和歌抄出』は一八七首のうちの一五八首であり、両者にはかなりの隔りがある。『名所和歌抄出』は本来ならば宗祇『万葉抄』に対して主要な典故とはなりえない規模の歌集なのであるが、以上に見てきたような本文の近さ、また一致箇所偏在などを考慮すると、両者には何

らかのつながりがあるように思われる。すなわち、『名所和歌抄出』は宗祇『万葉抄』に關しても、限定的ながら影響を及ぼした可能性もあるのではないかと思われるのである。

三 宗祇の連歌作品と『名所和歌抄出』

岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』の名所「藤江浦」に次のような記述がみえる。

藤江浦

新言 かもめゐる藤えの浦の奥つ洲に夜舟いさよふ月のさ

やけさ

万六 沖つなみ

万三

す、さちる

統後拾

万六長 藻塩焼

万六 いさり

する

「藤江浦」という歌枕について、「かもめゐる」という『新古今和歌集』一五五四の歌と「沖つなみ」以下五語の寄合語が掲げられている。注目されるのは「す、さちる」で、集付に「万三」とあることから『万葉集』(岩波新日本古典文学大系)巻三に由来するものとみられる。そこで『万葉集』巻三・二五二を見ると、

荒たへの藤江の浦にすき釣る海人とか見らむ旅行

くわれを

一本に云く、「白たへの藤江の浦にいざりする」
といふ。

という柿本人麻呂の歌が見える。歌意は「荒たへの）藤江の浦でスズキを釣る海人と見はしないだろうか、旅行く私を」。問題は、『万葉集』の「鱸（すずき）釣る」が、『名所和歌抄出』においては「薄（すずき）散る」になっていることである。いいかえれば、上代の『万葉集』において「鱸（すずき）」という魚類を表すことばであったものが、中世の『名所和歌抄出』においては「薄（すずき）」という植物を示すことばへと変化しているという見方も可能であろう。

ちなみに「鱸」は全長一メートルに達する海産魚、成長につれて名前の変わる出世魚で、『平家物語』（岩波新日本古典文学大系）の巻一・鱸の「（平清盛が）伊勢の海より、船にて熊野へ参られけるに、おほきなる鱸の、船に躍り入たりけるを」は、平家一門の繁栄の予兆を示す描写として有名である。ただし、『万葉集』二五二の「鱸（すずき）釣る」に特に祝意はうかがえないようである。一方、「薄（すずき）散る」は「植物の）薄の穂がほうけて飛散する」意（角川古語大辞典）という。

これについて、まず宗祇以前の和歌史において「鱸

（すずき）釣る」と「薄（すずき）散る」のいずれがより多く用いられたかを新編国歌大観で調べてみると、次のような結果になる。

鱸（すずき）釣る…三四例

薄（すずき）散る…六例

「鱸（すずき）釣る」の方が圧倒的に多いことが見て取れる。なお、「鱸（すずき）釣る」のもっとも早い用例は『万葉集』の例の二五二番歌であり、遅い用例は『玉葉和歌集』（新編国歌大観DVD-ROM版による）に載せる藤原為家の次のような歌かと思われる。

暮るるまにすずきつるらし夕塩のひがたのうらにあ

まの袖みゆ

一方、「薄（すずき）散る」の最古の用例は鎌倉初期、『土御門院御百首』（新編国歌大観DVD-ROM版による）に見える次のような歌かと推察される。

すすきちる秋の野風のいかならんよるなく虫の声の

さびしき

なお、宗祇『万葉抄』は『万葉集』二五二番歌を次のように記す。

白妙の藤江の浦にいざりするあまとかみらん旅ゆく

我を

宗祇『万葉抄』は、問題の箇所を「鱸(すずき) 釣る」でも「薄(すずき) 散る」でもなく、「いさりする」と記しているのである。これは前掲の『万葉集』二五二番歌の「一本」の記述に照応している。「いざり」とは「魚介をとること」(角川古語大辞典)という意味である。なお、右に述べたように「薄(すずき) 散る」も鎌倉初期以降用例が見られ、その頃から両者は共存していたものと思われる。

では、宗祇は自身の連歌において「鱸(すずき) 釣る」と「薄(すずき) 散る」のどちらをより多く用いたのだろうか。連歌大観によって見てみると、以下のような結果になる。

鱸(すずき) 釣る…: 用例なし

薄(すずき) 散る…: 八例

室町初期以前の和歌史の場合とは異なって、宗祇の連歌作品では「薄(すずき) 散る」の方が多数を占めていることがわかる。用例を見ると、たとえば『老葉』には、

すすきちる夜の風のさびしさ

きりぎりすかたぶく月に声ふけて

とあり、これは先述の『土御門院御百首』の「すすきちる秋の野風のいかならん」という歌を踏まえたものか

と思われる。また『下草』にも、

あらしの露に月なまたれそ

薄ちる野は夕かげのをぐら山

と見える。これらの例から「薄(すずき) 散る」は、秋の夕べや夜、月光の下で折からの嵐に薄の穂がほうけて飛散する様子を表すことばであったと理解される。注目すべきは、宗祇が「鱸(すずき) 釣る」を自らの連歌にほとんど用いず、一方、「薄(すずき) 散る」を少なからず取り入れていることである。そのことから、宗祇はやや即物的な「鱸(すずき) 釣る」よりも、「薄(すずき) 散る」という幻想的な表現の方を好んだと考えられるのではあるまいか。「薄(すずき) 散る」を選択した宗祇は、「鱸(すずき) 釣る」を優位に位置づける従来の万葉的な和歌観に、一種の異議を唱えようとしたとも考えられ、そのことは、中世の和歌史、文学史が宗祇によってある屈折をもたらされたことを意味するものと考えうるかも知れない。

四 『宗祇名所和歌』と『名所和歌抄出』

愛知県刈谷市中央図書館村上文庫蔵『蓬廬雜鈔』(六二〇三)第十六冊に興味ぶかい名所歌集が収められてい

る。一首にいくつかの名所を詠み込んで名所を覚えやすくしたものである。『内裏名所百首』の三百首の抄出本に付載されていることからみても初心者向けの名所歌集と考えられる。末尾の識語に

宗祇在判

以上六十余州大略如此

于時永祿九年丙寅八月廿三日

宗祇の名前と永祿九（一五六六）年という年号が見えることから、この名所歌集をかつてわたくしに『宗祇名所和歌』と名付けた⁽¹⁷⁾。歌数は計九一首、冒頭と末尾を掲げると、

一 山城や賀茂の神山日影山かた岡た、す貴船山しな

二 山城や木幡音羽に笠取や岩田宇治山真木の嶋山

三 山城や大原小野に音無や嵯峨嵐山松の尾のやま

（中略）

九一 つしまには対馬のわたり浅ち山これらの外は

みえぬ成けり

冒頭の歌には「賀茂」「神山」「日影山」「かた岡」「た、す」「貴船」「山しな」の計七箇所（17）の歌枕が詠み込まれている。しかも注目されるのは、冒頭歌から三番歌

に詠まれた歌枕が、岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』の冒頭の歌枕と順序までも一致することである。岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』冒頭の歌枕を左に掲げる。×印は『宗祇名所和歌』に見当たらない名所である。

賀茂、神山、日影山、×御手洗、片岡、紀宮、貴布（乳む）

禰、×瀬見小川、×有栖河、×齋院、山階、×鏡山、

木幡、音羽、笠取山、岩田、宇治、×朝日山、檜嶋、

×橘小嶋、×大原入江、大原、×瀧清水、小野山、

音無滝、嵯峨、嵐山、松尾、（下略）

両者の密接な関わりがみてとれる。そうした関係は冒頭のみにとどまらず、他の箇所からもうかがえるようである。たとえば、『宗祇名所和歌』の五畿内のうち二二番歌までについて見てみても、一二一箇所中八九箇所、すなわち、七三・六%の歌枕が岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』に一致しているのである。そうしたことから、『宗祇名所和歌』は岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』から少なからぬ影響を受けたものと考えられる。『宗祇名所和歌』は、『浅茅』や宗祇『万葉抄』のように宗祇の著作と認定されるものではないけれども、見方を変えれば、『名所和歌抄出』という書物が入びとに好んで読まれていた当時の状況を示すものとみられるであろう。

それに関わることとして、大谷大学図書館にも『宗祇名所和歌』に似た名所歌集が所蔵されていることを指摘しておきたい。該書は真宗大谷派初代講師の恵空が十七歳（識語には十六歳）の折に書写した『名所尽』（外大一一六一）に収める名所歌集で、『宗祇名所和歌』と同じく『内裏名所百首』の抄出本に付載されている。末尾の識語には、

名所尽終／万治三年雪月十七日写之訖／江州栗太郎
／金森村／恵空／十六才書之

右一冊者秘密之書也／都不可外見物也

万治三（一六六〇）年に恵空が書写したものと知られる。十七歳という恵空の年齢、また『内裏名所百首』の抄出本への付載という二点から、こちらの名所歌集も初心者向けの名所歌集であったと考えられる。恵空には真宗関係を中心とする著作が多く、刊行されたものに『讀仏慈悲集』二卷（貞享五年）、『叢林集』九卷（享保三年）などがあり、また大谷大学図書館にも『觀經疏玄義分科』（寛文十二年写）、『御影像記』（元禄二年写）、『浄土和讃二十一首註』ほか多数の自筆の著作が収められている。これらの名所歌集の歌数は計一七八首、冒頭と末尾を以下に掲げる。

一 山城の加茂の神山日かけ山其神山や又御あれや
ま砌

二 石川のせみの小川やた、す河御おやの神もかも（に脱カ）
こそあれ

三 賀茂にあるいつきの宮は二葉山わけいるつちや
きぬ笠の山

（中略）

一七八 相模なる箱根の山路水無瀬川見越か嶽は宇
津の屋の里

冒頭の「山城の加茂の神山日かけ山其神山や又御あれやま砌」には、五箇所の歌枕が詠み込まれている。末尾の「砌」は、この名所歌集の成立ないしは流布に、宗祇の連歌の師であった宗砌が関わった可能性を示唆するものと思われる。そのことから、この名所歌集をかつてわたくしに『宗砌名所和歌』と称した⁽¹⁸⁾これらの書物が宗祇や宗砌によって作成されたと主張するにはまだ材料に乏しいけれども、少なくとも彼らの名前が見えることから、連歌師とそうした名所歌集との密接な関連がうかがえて、きわめて興味ぶかいことである。

五 『名所和歌抄出』と『万葉集』

前章まで岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』がおもに宗祇の著作などに与えた影響について見てきたが、このあたりで岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』がどのような『万葉集』と関わりが深いのかということも調べておく必要がある⁽¹⁹⁾。まず、『万葉集』三〇七二番歌と関連する岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』などの本文を次に掲げる。

『万葉集』三〇七二 大崎之 有磯乃渡 延久受乃

ゆくへもなくや
こひわたりなむ
往方無哉 恋度南

(卷十二)

(歌意) 大崎の荒磯の渡り場に延びる葛のように、進むべき方もなくて恋い続けることだろうか。

岩 大さきのありそのわたりはふくすの行方なくや

恋わたりなん

宗 おほさきのありそのわたりはふ葛の行かたなく

や恋わたりなん

拔書 大さきのありそのわたりはふ葛の行かたなく

や恋わたりなん

右によると、通行の『万葉集』三〇七二番歌の第四句の訓「ゆくへもなくや」と、岩瀬文庫蔵『名所和歌抄

出』、宗祇『万葉抄』、『万葉集拔書』の「ゆくかたなくや」が対立しているものとみなされる。以下に校本万葉集所載の諸本の訓を掲げる。

校本万葉集第四句の訓「ユクヘモナクヤ」、元暦校本：ゆくかたなしや、類聚古集：ゆくかたなくや、古葉略類聚抄：ユクカタナシヤ、細井本：ユクカタナクヤ、西本願寺本：ユクカタナクヤ、大矢本・京都大学本：「ヘモ」青。京都大学本：緒で「ヘモ」を消し、右側に緒で「カタ」。廣瀬本：ユクカタナシヤ

これによると、『名所和歌抄出』などの「ゆくかたなくや」という本文は、鎌倉期の仙覚の新品とは異なり、類聚古集、細井本などの、仙覚以前の次点本に一致していることがうかがえる(なお後述)。

ついで『万葉集』四二五七番歌について考えてみる。

『万葉集』四二五七 手束弓 手尔取持而 朝獨尔

きみはたしぬ
たなくらのの
君者立之奴 多奈久良能野尔 (卷十九)

(歌意) 手束弓を手に取り持つて、朝狩をしに君はお発ちになった、棚倉の野に。

岩 たつか弓手に取もちて朝かりに君はたちぬか手

枕の野に

宗 (当該歌なし)

拔書 (当該歌なし)

右によれば、通行の『万葉集』四二五七番歌の第四句の訓は「きみはたたしぬ」であり、一方、岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』の第四句は「君はたちぬか」と記されている。これらを校本万葉集所載の諸本の訓と比較してみる。

校本万葉集第四句の訓「キミハタチヌ」、京都大学本：「キミハタチヌ」を赅で「キミハタ、イヌ」に訂正、古葉略類聚抄：キミハタ、シヌ、秘府本万葉集抄：キミタチユキヌ、廣瀬本：キミハタチヌ^{タ、シヌ}

袖中抄：きみはたちいぬ、五代集歌枕：君はたちいぬ、隆源口伝：君は立たれぬ、俊頼髓脳：君はたちきぬ、綺語抄：きみたちいぬの、和歌童蒙抄：きみはた、しぬ

夫木和歌抄 一六九六〇：きみはたちきぬ、歌枕名寄 三一二七：キミハタチヌ

まず、通行の『万葉集』四二五七の「きみはたたしぬ」という訓は、校本万葉集の「キミハタチヌ」とい

う一般的な訓に一致していない。「きみはたたしぬ」は諸本の中では古葉略類聚抄のみに一致している。それに対して、岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』の「君はたちぬか」は、校本万葉集所載の諸本のいずれの訓とも異なっていて、さらに『俊頼髓脳』『和歌童蒙抄』『袖中抄』などといった歌学書の訓みとも一致しない。しかも、この「たつかゆみ」という万葉歌を宗祇『万葉抄』や『万葉集拔書』は載せていないのである。

以上、わずか二首をあげたに過ぎないが、岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』がどのような『万葉集』に基づいたのかといった問題について考察してみた。岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』の『万葉集』本文は、鎌倉期の仙覚新点とは異なり、類聚古集、細井本などの仙覚以前の次点本に一致していることが一例からうかがえた。これは宗祇『万葉抄』の『万葉集』本文について指摘されていることと近似するものであり、注意しておいてよいであろう。さらに、岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』の『万葉集』本文が、従来知られる『万葉集』や歌学書などの訓のいずれとも一致しない場合も見受けられた。こうした問題は、一章から三章において確認した宗祇の著作や連歌、つまりは宗祇の文学と『名所和歌抄出』との緊密な関係から

すれば、今後さらに深く追求すべき課題であるように思う。

六 岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』に近い系統の名所歌集

以上において岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』のみを取り上げてきたが、それに近い系統の名所歌集が次のように五点報告されている。⁽²⁾

- 一 渋谷虎雄氏蔵『名所和歌抄出』（永祿七（一五六四）年の本奥書。享保十七（一七三二）年書写）―渋谷虎雄『古文獻所収万葉和歌集成 室町後期』（桜楓社、昭六〇）に万葉歌のみ翻刻。
- 二 神宮徴古館蔵『名所和歌抄出』（明応十一（一五〇二）年の年記、伝荒木田守武筆、守梁の花押）
- 三 神宮文庫蔵『名所和歌抄出』（上下二巻のうち下巻のみ残存。落丁あり）
- 四 岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』（仁和寺菩提院）の朱長角印）
- 五 慶応義塾大学附属研究所斯道文庫蔵『名所和歌抄出』
- 六 宮内庁書陵部蔵『名所和歌』（良俊（未詳）による

長享二（一四八八）年の本奥書）

岩瀬文庫蔵本を含めて計六点、これらは名所の配列や収められている和歌や寄合語などが互いに少しずつ異なっている。しかも注目すべきことに、それらの伝本には、永祿七（一五六四）年、明応十一年―明応は十年までしかなく、この年号は未詳―および長享二（一四八八）年といった年記が見える。宗祇の活躍した室町時代中期に、岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』によく似た名所歌集が少なからず流布していたことがうかがわれ、注意される。これらの相互の関連については、今後さらに検討する必要がある。

むすび

書物に対する志向も時代とともに変化する。書物の体系・読書の体系とでもいうべきものが変化してゆくのである。歴史に置き去られた書物、そうしたものによって中世の人びとの最も基礎的な教養の一面が形成されていたことを考える必要があると思う。宗祇の場合、彼の用いる名所や歌枕観を考える際、岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』が不可欠の資料であることを指摘した。岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』は現代ではほぼ無名の名所歌集である

が、宗祇はそれに近い歌集の読者だったのである。現代に比べ人びとの周囲にはるかに書物の少なかつた当時、読まれた書物と作品とは、きわめて密接な関係にあったものと想定される。数的にも量的にも膨大な中世の名所歌集については、少しずつ伝本の整理がなされているけれども、わたくしには、右のような享受史の視点からも、興味ぶかい世界であるように思われるのである。

註

- (1) 西尾市岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』の引用は原本複写に拠る。なお、平成二八年に『西尾市岩瀬文庫蔵 名所和歌抄出』として翻刻を公刊した(文栄堂)。
- (2) 『浅茅』の引用は金子金治郎編『連歌貴重文献集成』(勉誠社、昭56) 6所収の影印に拠る。
- (3) 拙稿「宗祇『浅茅』と『名所和歌抄出』」(『文藝論叢』28、大谷大学文芸学会、昭62・3)。のちに拙著『院政期以後の歌学書と歌枕』(清文堂、平18) 所収。
- (4) この『名所和歌抄出』は、乾安代氏の紹介された「柳原家旧蔵本目録」(『岩瀬文庫本調査おぼえがき 付 柳原家旧蔵本目録』昭55)に載る、「一 名所和歌 写式冊」に当たるか。なお、柳原家旧蔵書で「仁和寺菩提院」の印記を有するものに、『連歌新式追加并新式今案等』「聖徳太子憲法」などがあるという。
- (5) 井上宗雄「名所歌集(歌枕書)伝本書目稿」(『立教大
学日本文学』16、昭41・6)。
(6) 注(3)に同じ。
(7) 宗祇『万葉抄』の引用は佐佐木信綱編『萬葉學叢刊 中世編』(臨川書店、昭47)に拠る。
(8) この章については、拙稿「中世における『万葉集』享受の様相―『名所和歌抄出』を中心に―」(『文藝論叢』88、池田敬子教授退職記念、大谷大学文芸学会、平29・3)に基づきながら、その後の考察を加えた。
(9) 和歌文学大辞典(古典ライブラリー、平26)「万葉抄」(中嶋真也執筆)の項
(10) 岩波書店、昭58。「万葉集抄」(渋谷虎雄執筆)の項
(11) 『万葉集大成―』特殊研究篇(平凡社、昭33) 所収
(12) 勉誠社、昭60出版
(13) 注(8)の拙稿による。
(14) 『万葉集抜書』の引用は、渋谷虎雄『古文獻所収万葉和歌集成 室町前期』(桜楓社、昭59) 所収の翻刻に拠る。
(15) 『万葉集抜書』と『宗祇萬葉抄』との関係―中世「萬葉集」享受の基礎的研究のために―(『万葉古代学研究 年報』17、平31・3)。
(16) この章については、拙稿「歌語の怪―「鱸(すずき)釣る」から「薄(すすき)散る」へ」(『書香』大谷大学図書館・博物館報36、平31・3)に基づき、若干手を加えた。
(17) 「資料紹介『宗祇名所和歌』・『宗祇名所和歌』」(『文藝論叢』35、平2・9)。のちに拙著『院政期以後の歌学

書と歌枕』(清文堂、平18)所収。

(18) 注(17)に同じ。

(19) この問題については、注(8)の前掲拙稿においても考察を加えたが、より詳細に検討してみた。

(20) ちなみに、宗祇『万葉抄』の万葉歌の訓については、日本古典文学大辞典に「西本願寺本系のそれではなく、もう少し古い『類聚古集』・細井本等の古訓のようである。」と記し、両角倉一『宗祇連歌の研究』(前掲)、小川靖彦『統合されるよみ(訓み・読み)——宗祇『万葉抄』の萬葉集訓読について(中世と近世の間)——』(『國文目白』40、平13・2。のちに『萬葉学史の研究』(おうふう、平19)所収)などにも同様の記述を載せる。今後より詳細な検討が必要だが、岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』の万葉歌が宗祇『万葉抄』の万葉歌とよく似た性質を有しているとすれば、両者の距離はさらに近いものということになるかも知れない。

(21) それに関して「宗祇の『万葉集』享受について——『名所和歌抄出』との関わりから」(和歌文学会関西四月例会(第一二三回)、平29・4・22、於立命館大学衣笠キャンパス)という口頭発表を行った。

*本稿は、令和元年度大谷大学国文学会において「岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』のこと——三十年の研究生活をふりかえって——」と題して行った講演(最終講義)に訂正・補筆したものである。

(本学教授)